

【課題3】

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限りなく悲しいものに思はせる、麥がのび、見わたす限りの平野に黄ろい菜の花の毛氈が柔かな軟風に薰り初めるころ、まだ見ぬ幸を求むるためにうらわかい町の娘の一群は笈に身を褭し、哀れな巡禮の姿となつて、初めて西國三十三番の札所を旅して歩く、巡禮に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、單にお嫁め入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。十その留守の間にも水車は長閑かに廻り、町端れの飾屋の爺は大きな鼈甲縁の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にチンカチと鎚を鳴らし、片思の薄葉鐵職人はぢり／＼と赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服の商人は生温い挨拶の言葉をかけて戸毎を覗き初める。春も半ばとなつて菜の花もちりかゝるころには街道のところどころに木蠟を平準して干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑の女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が作られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ大麥の花が咲き、からしの花も實となる晩春の名残惜しさは青くさい芥子の萼や新らしい蠶豆の香ひにいつしかとまたまぎれてゆく。

まだ夏には早い五月の水路に杉の葉の飾りを取りつけ初めた大きな三神丸の一部をふと學校がへりに發見した沖ノ端の子供の喜びは何に譬へやう。鱸の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺には櫻の造花を隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日となれば粹な町内の若い衆が紺の半被に棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ゆるたびに幕を替え、日を替ゆるたびに歌舞伎の藝題もと替えて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに水郷の歡を盡くして別れるものゝ、何處かに頽廢の趣が見えて祭の濟んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。

この騒ぎが靜まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か、螢か、鵜の鳥か

螢ならばお手にとろ、

お星様ならおがみませう……

おさな

穉い時私はよくかういふ子守唄をきかされた、さうして恐ろしい夜の闇にをびえながら、乳母の背中から手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の心に顫ふるへたであらう。實際螢は地方の名物である。馬鈴薯じゃがいもの花さくころ、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流れを遡さかのぼり初める。さうして甘酸あまずゆい燐光りんこうの息するたびに、あをあをと眼めに沁しみみる螢籠ほたるかごに美しい假寝の夢を時たまに閃めかしながら水のまにまに夜よをこめて流れ下るのを習慣とするのである。